20年間、コンクール不出場の吹奏楽部

2016年、荒砥高等学校へ赴任し、吹奏楽部の顧問となった本田教諭が目の当たりにしたのは、古びた楽器ばかりが並んだ音楽室で、部員数たった4人で活動している様子でした。生徒数の減少により部員の確保が難しく、コンクールなどへの参加も断念せざるを得ない状況が続き、大きな活動といえば、保育園やこども園での訪問演奏だけでした。

「どうせ荒高だから」というコンプレックス

吹奏楽部には、部員数不足のほかにもうひとつ、大きな問題がありました。それは、生徒らが口々に言う「どうせ荒高だから」という言葉。生徒らはこの言葉を口癖のように話し、何をやるにせよ、はじめから諦めムードが漂っていました。

本田教諭はこの時、生徒らが心に抱く「どうせ荒高だから」をどうひっくり返せるかを考えることにしました。

新たな部員の勧誘と環境づくり

赴任した年、本田教諭と部員らがまずはじめに取り組んだことが、部員集めと環境づくりでした。熱心な勧誘の成果もあり、10名が入部。しかし、そこで新たな問題となったのが楽器の不足。新たな楽器を買う余裕もなく、当初はプラスチック製の楽器も使用していました。

部員も増えたことで以前よりも活気づいた吹奏楽部。「どうせ、結果なんかわかっている」「今さら恥をかきたくない」と、コンクールに出たがらなかった生徒らにも、少しずつ「挑戦してみよう」と心に変化が現れはじめました。

創部以来初の金賞獲得 生徒の心に火がついた

赴任した翌年となる2017年、アンサンブルコンテストで創部以来初となる金賞を獲得。生徒らの心に「やればできる」というプラスの思考が生まれはじめ、「もっと上を目指したい」と生徒の心に火がつきました。その結果、生徒らの行動にも変化がありました。「あいさつはされる前に行う」「掃除や後片付けをしっかり行う」「時間を守る」といった行動を生徒自身でするようになったのです。

その理念は、先輩から後輩へとしっかり受け継がれており、ほとんどの部員が腕時計を身に着け、時間配分を意識した活動をしており、徹底したスケジュール管理が行われています。

部活終了後、明日のスケジュールを確認

地元の熱い応援が生徒の自信につながる

本田教諭はこれまで、さまざまな高校で指導に携わってきましたが、「荒砥高校ほど地域の応援が熱いところはない」と話します。毎年開催している定期演奏会も、たくさんの町民の方に足を運んでいただいており、昨年は600名を超える来場者で大盛況となりました。そうした、地元の皆さんから伝わる期待を肌で感じている生徒は、自信をつけ、「もっといろんなことに挑戦したい」と意欲を沸かせています。

今年も、コロナ禍ではありますが、部員の「私たちの力で町の皆さんに元気を与えたい」という熱い思いから、定期演奏会の開催を決定しました。11月8日の開催に向け、今まさに練習に励んでいます。

吹奏楽部の活躍により学校全体にも変化が―

吹奏楽部の部員たちの頑張りが相乗効果で全校生徒にも変化が見られたと本田教諭は話します。まず、学校全体が落ち着いた校風になったようで、いわゆる特別指導（謹慎、停学など）の昨年1年間の発生件数は0件でした。

また、自分の進路を見据え、授業や部活動に真剣に取り組む生徒が増え、荒砥高校の進路実績も充実してきました。

『いつでもリスタートできる』これが荒高の強み

何かにチャレンジしたい、再トライしてみたいと考えている生徒に対し、教員が手厚くサポートできる環境こそが荒砥高校の最大の強みと本田教諭は話します。リスタートを切った生徒は、驚くほどの成長ぶりを見せます。

地域からたくさんのことを学び、地域に貢献する人材を育成するための環境が荒砥高等学校にはあるのです。

本田　礼 教諭

山形市出身
2016年から荒砥高等学校勤務。教科は芸術科（音楽）。進路指導も担当しており、「胸を張って荒砥高校を卒業してほしい」という思いで日々、生徒と向き合っている。

―特集―

軌跡をたどる

―荒砥高等学校吹奏楽部―

町内唯一の高等学校である「山形県立荒砥高等学校」。その荒砥高等学校で今、目覚ましい活躍を見せているのが吹奏楽部。全校生徒の2割弱が吹奏楽部員という高い部員率を誇り、県内の小規模校では唯一コンクールへの参加や定期演奏会などを行っている。2017年、全日本アンサンブルコンテスト置賜地区大会において、木管八重奏で創部以来初の金賞を獲得。以後も数々のコンクールで入賞を果たしている。

荒砥高等学校吹奏楽部は1976年に創部。近年は、生徒数の減少から部員不足に悩まされ、コンクールなどに出場できない状況が続いた。そのような状況のなか、転機となったのが2016年。現在の吹奏楽部顧問である本田礼教諭が赴任し、吹奏楽部の再建を始めた。

赴任当時、部員数たった4人という状況に加え、創部からまったく更新されず老朽化のすすんだ楽器。そして、何よりも部員らが心に抱く「どうせ荒高だから」という諦めとコンプレックス。課題は山のようにあったという。

しかし、さまざまな課題と向き合ってきた本田教諭は、これまでを振り返り「荒高だったからこそ生徒らは変わることができた」と語る。では、どのようにして吹奏楽部が急成長を遂げたのか、その軌跡をたどる。

山形県立荒砥高等学校
海和（かいわ）　雅人　校長

本校は今年で創立72年目を迎えました。これまでに、9000人を超える卒業生を有する歴史と伝統ある高校です。

平成25年より普通科から総合学科へと変わり、生徒自身が自らの進路に沿った科目を選択し、学習できるようになりました。また、小規模校だからこそ、生徒一人一人にも目が行き届くため、手厚いサポートができることが本校の強みであります。今まで、自分自身の中に秘めた可能性に気づけなかった生徒も、学校生活のなかで十分に発揮しております。

さて、本校自慢の吹奏楽部ですが、近年の成績は大変すばらしく、学校の校訓である「克己復禮（こっきふくれい）」を体現している存在でもあります。チャレンジ精神を持ち、どんな困難にも立ち向かう心。そして、自分に厳しく、仲間と支え合いながら常に全力で取り組む部員の姿勢は、本校生徒の模範にもなります。

本校は町にとって、人材確保の面においても非常に重要な役割を果たしております。本年度より、町と連携をとり「荒砥高校魅力化プロジェクト」も立ち上がりました。地域との結びつきをより密にし、地域に貢献する有為な人材を育ててまいります。